

「まじる」「まじらふ」と「マジハル」

— 中世の作品の用例から遡行して考える中古和文の「まじる」「まじらふ」の意味 —

関 一 雄

要旨

「まじる」「まじらふ」に対し「マジハル」は、中古（平安時代）にあつて、意味差を持つと同時に、物語用語（和文）対日常的用語として、峻別されていた。日常的用語としての「マジハル」はいわゆる訓点語として文献に現れるのに対し、物語用語では、「まじらひつく」「たちまじらふ」「たちまじる」などの複合（派生）動詞の形で「マジハル」とほぼ同義の動作を精細に描写した。

一

橘成季が一二五四（建長六）年に編著したと記す『古今著聞集』に、次のように「まじる」と「マジハル」が同一説話に隣接して用いられた例がある。（テキストは「日本古典文学大系」により、所在の頁を付す）

◎（夫↓妻）「略」今更身の程うたてくて、かくてなにしに人にまじらふらんとおもふなり」とうちくどきいへば、妻うちなきて、

「まじる」「まじらふ」と「マジハル」

（妻↓夫）「のたまははすること、尤其いはれあり。まことにさる事なり。人にまじはるならひはよき事にもあしき事にも、其ことにもるゝは口惜しきなり。（略）」（卷十二 三三三—三三六）

この場面は、仲間の侍たちが、七半という博打に熱中しているのに、貧しい夫が金が無く、仲間外れになつてゐることを、妻に嘆いて語つたのに対し、妻が「人と交際できないのはつらいもの」と同情するところである。ここに使われた「まじる」と「マジハル」は、一見全くの同義語のようである。

しかし、少し考えてみると、夫は「侍」という身分だけで他の侍たちの中に「入り込んでゐる」という意味で「まじる」を用いたと解されるのに対し、妻は上記のように、「交際する」という意で「マジハル」を用いたと言えそうである。

さて、妻は自分の着ていた衣を質に入れ、錢五百文を借りて夫に与える。その金で夫は博打の仲間に加わることになる。その場面は次のようである。（以下、○は「まじる」●は「マジハル」

の例文)

○例のことなれば、あつまりてうちのゝしる(侍たち)中に(夫)まじりぬ。(略)(侍)夫「さしもはやりたることに、たゞひとりまじりたまはざりつれば、賢人だてかとおもひて侍つるに、いかにしてかくは」などいへば、(夫)侍「その事に候。今日よりくはゝり候べし」とこたへて、(卷十二三三四ペ)

夫の動作とそのことを述べる仲間の侍の会話中に「まじる」が用いられるのは前掲の夫の会話中のものと同じで、この例の夫の会話中に「くははる」が用いられ、やがて夫と他の侍の間は「マジハル」動作へと深まるのである。

●隆房大納言、檢非違使別当のとき、白川に強盗入にけり。其家にすくやかなるものありて、強盗とたゝかひけるが、なにとなくて強盗の中にまぎれまじりはりにけり。うちあはんには、しおほせんことかたくおぼえければ、かくまじはりて、物わけん所に行て、強盗のかほをも見、(卷十二三四四ペ)

この例で分かることは「マジハル」は、単に〈入り込む〉のではなく、〈入り込んで対等に付き合う〉〈交際する〉動作であることである。従って強盗たちは「すくやかなるもの」をすっかり仲間と思ひ込んで後には「おのゝ物わけて、この男(すくやかなるもの)にもあたへてけり」と記すのである。

●惟成則もと鳥を切て、義懐卿にいひけるは、「貴殿かたじけなく外戚としてをもくをはしつるに、外人と成て、今更なる世に

まじはらん事、いかゞあんじ給」と。(卷十三三七四ペ)

右の引用文中の「惟成」は花山院の近臣、「義懐」はその外戚で、花山院の出家でともに「もとどり(髻)」(引用文中の「もと鳥」は一部分当て字)を切つて、出家するという場面である。世に「マジハル」は、この例では政治家として他の人々と〈付き合う〉〈交際する〉動作を意味している。

●鵲□飛来て、その首尾をうごかすをみて、二神まなびてまじはる事をえたり。(卷八二五一ペ)

伊弉諾・伊弉册二の神が夫婦となったという話の一節で〈性交する〉動作を表している。

「マジハル」の他の例は省略し、「まじる」の例を追加しよう。○あか月にのぞみて、又めをもてあげて見るに、にしの中に、小尼せうゝまじりて、うつゝに見えて、やがて、うせにけり。

(卷二十五三二ペ)

酒の肴にしている「にし」(螺)の中に「小尼」が〈入り込んでいる〉というのである。

○「つぼは、うち入たるたびやまじりたりし。はじめおはりおなじ程にすゝみてぞ侍しか」といふ。(卷六一二〇ペ)

太鼓を打つ時の「つぼ」(間合)が適切であったか、どうかをいうのに「まじる」が用いられている。

次に「マジハル」の他動詞に当たる語は「マジフ(下二段)」であり、「まじる」の他動詞に当たる語は「まず(下二段)」であ

ることを述べる。

◆大なる牛の跡にぞ似たりける。そのひづめのあと、あをくあかき色をまじへたりけり。(卷十七 四五七ペ)

鬼の足跡があったという話で、それが大牛のそのようので、青色・赤色を〈交差させている〉ことを表している。

◇彼卿は、くろくぬりたるほそぼねに、黄なる紙はりて、楽府の要文を真草にうちまぜて、ところ／＼書ていだされたりけるを、

(卷七 二三八ペ)

「真草にうちまぜ」は、〈楷書と草書を入り込ませる〉意である。前掲の青・赤の色の場合と異なり、文字を〈交差させて〉は読めなくなる。

◇小衣の絵八卷、又さま／＼の物語まぜて四季に書て、

(卷十一 三二〇ペ)

「小衣」は『狭衣物語』のことで、その他に色々な物語をへ一緒にするの意である。

二

『保元物語』・『平家物語』(二作品とも「日本古典文学大系」による)や『発心集』(「本文・自立語索引」による)の「マジハル」には「山林にまじはる」「山野にまじはる」と用いられて、〈山林・山野に隠れる〉と解されている例が見られる。

●義朝波多野次郎義通を招て、「母の相具し乳母の抱て、山林に

まじはりたらんは力なし。京中にあらむずる幼者共をば、皆尋求て失べし。(略)との給ひければ、『保元』下 一五〇ペ)

●講堂中堂すべて諸堂一字ものこさず焼払て、山野にまじはるべき由、三千一同に僉議しけり。(『平家』卷一、一三八ペ)

●或は煙の内をいでず、炎にむすんでおほくほろびにしかば、わづかにのこれる輩は山林にまじはり、跡をとゞむるもの一人もなし。(『平家』卷六、三八六ペ)

●かく云ふ心は、賢き人の世を背く習ひ、我が身は市の中にあれども其の徳を能くかくして人にもらさぬ也。山林に交はり、跡を暗うするは、人の中に有りて徳をえかくさぬ人のふるまひなるべし。(『発心集』第一 二八ペ)

●若し、人、仏道を行はん為に、山林にまじはり、ひとり広野の中にもをらん時、身を恐れ寿を惜む心あらば、必ずしも仏の擁護し給ふらむとは憑むべからず。(『発心集』第三 八(一)ペ)

前節で述べたように、「マジハル」がへ入り込んで対等に付き合う〈交際する〉の意であるならば、右のような諸例で前述のような意になるのはなぜであろうか。

人間同士の場合の「マジハル」は、「まじる」とは異なり、へ人と人が付き合っ一体化する〈という意味ももっている〉と考えられる。「山林・山野にまじはる」は、へ人が山林・山野と一体化する〈と解される〉だろう。

『平家』卷六の当該例の後に「跡をとゞむるもの一人もなし」

「まじる」「まじらふ」と「マジハル」

とあり、『癡心集』第一の当該例の後に「跡を暗うする」とあるのは、かような用法の「マジハル」が単に〈隠れる〉意であったのではなく、〈人が山林・山野と一体化する〉の意であって、それは『癡心集』第三の例を見れば〈山中に閑居する〉意にも用いられていることから言えることである。

『保元物語』・『平治物語』・『平家物語』で「マジハル」の前掲以外の例は次のものである。

●「略」君既に十九代、臣また以十一代、行所特政にて一度も悪事にまじはらず。(略)『平治』上二二一ペ)

●山王(巫女)おりさせ給て、やう／＼御託宣こそおそろしけれ。(略)(大殿ノ北ノ政所ノ御立願ノ)一には、今度殿下の寿命をたすけてたべ。さも候はゞ、したどのに候もろ／＼のかたは人にまじは(ツ)て、一千日が間朝夕みやづかひ申さむとなり。(略)子を思ふ道にまよひぬれば、いぶせき事もわすられて、あさましげなるかたはうどにまじは(ツ)て、一千日が間、朝夕みやづかひ申さむと仰らるゝこそ、誠に哀におぼしめせ。(略)』

『平家』巻第一、一三二一ペ)
●大臣みづから彼行道の中にまじは(ツ)て、西方にむかひ、(略)と、『平家』巻三、二四八ペ)

●癡心色相の難答に、源仁・義真も口をとちて、つるに四宗帰伏して門葉にまじはり、一朝信仰してはじめて法流をうけ給ふ。

(『平家』巻十、三〇一ペ)

「悪事にまじはる」(保元)・「かたは人にまじはる」(平家)・「門葉にまじはる」(平家)の「マジハル」は、前節の例と同じく〈入り込んで対等に付き合う〉動作を表している。

●(入道成頼)「略」かくて聞も同事なれ共、まのあたり立まじは(ツ)て見ましかば、いかにも心うからむ。(略)』

(『平家』巻三、二六六ペ)

右の例では、複合(派生)動詞「たちまじはる」の形で〈その場に入り込んでいって付き合う〉の意がよく表されている。

一方の「まじる」であるが、

○兵藤内は大臆病者にて、軍に向たれ共、矢の一も射ず、敵をもうたず、我身手おふまでは思もよらず、何となう尻付して勢の中にあひまじり、軍するよししてありけるが、馬を射させてある小家へにげいる。(『平治』中二三二一ペ)

の例では、大臆病者の兵藤内が、仲間と一緒に戦うのであるが、形だけは軍勢にへまじっているという動作を「あひまじる」で表現しているのである。

○源氏の船は三千(餘)艘、平家の舟は千餘艘、唐船少々あひまじれり。源氏の勢はかさなれば、平家のせいは落ぞゆく。

(『平家』巻十一、三二八ペ)

の例では、他とは違った「唐船」のへまじっていることをいっている。先の例の「兵藤内」も、この「唐船」も集団のなかでいわば異質のものである。

次に『発心集』の「まじる」の例を見る。

○今も昔も実に心を発せる人は、かやうに古郷をはなれ、見ずし
らぬ処にていさぎよく名利をば捨て、失する也。(略 古郷にす
み、しれる人にまじりては、いかでか一念の妄心おこらざらん。

(第一一七ペ)

○或る人かたる中に行て、(略)すゝめて云ふ様、「なんぢ、老い
せまりて、残命いまいくばくかはあらん。行歩もかなはざれば、
人にまじるにつけても苦しからん。今は出家うちして、念仏申
してのどかにゐたれ。(略)」と云ふ。(第五一三五ペ)

○すでに仏事はじまりて後、此の女房、人にまじりて聴聞す。初
めより終りまで、泣く事おこたらず。(第五一四七ペ)

○此の娘、いとあやしげなる帷子すがたにて、下主の子どもにま
じりて、土におりて、たてじとみの際にてあそぶ。

(第六一六一ペ)

これらの「まじる」は、前節で『古今著聞集』のそれと「マジ
ハル」が、一見同義語のように思えたのと似ている。しかし、
「まじる」が、へ(異質のものが)集団の中にまじっているの意
であるとする、右の第一例は仏道の心を起こしたものの(異質の
もの)が、俗人の群れの中に「まじる」ことをいっており、第二
例は高齢の人(異質のもの)が若者たちの群れの中に「まじる」
ことをいっている。第三例は僧侶の葬式には無関係に見える「女
房」(異質のもの)が「まじる」のであり、第四例も身分のある娘

(異質のもの)が、下衆の子どもの群れの中に「まじる」のである。

三

前節までに説話集と軍記物語の例を見てきたので、本節では
『今鏡』と『とはずがたり』のものを取り上げることにする。

『今鏡』(「本文及び総索引」による)の「マジハル」の用法には
偏りが見られる。

●位にしたがへるいろ／＼の衣の袖、近衛司の平胡□、平緒など、
目もあやなるに、きぬの色まじはれるうちより、唐の舞、高麗
の舞人、左右かた／＼袖振るほどなど、(第一一三ペ)

●御車副の、狩衣袴なども、いろ／＼の文押しなどして、かゝや
きあえるに、やり縄などいふものも、あしつ緒なむどにやより
あはせたる、いろ／＼まじはれるに御簾の掛け緒などのやうに、
かな物房なむど、ゆら／＼と飾りて、(第二一五五ペ)

右の二例は、布(幕)・緒の色が入り交じわっていることを描
写した用例である。

●御身の才も、幼くよりすぐれてをはしますとて、内宴の詩など
も、兄をさしをきたてまつりて、その筵にまじはらせ給き。

(第五一三二ペ)

この例は、藤原基房が、兄の基実をさしおいて、内宴の詩の席
について他の人々とまじわったという場面のものである。

次に「まじる」の例を見る。

「まじる」「まじらふ」と「マジハル」

「まじる」「まじらふ」と「マジハル」

○中納言匡房まだ下臈に侍けるに、世を恨みて、「山の中に入りて、世にもまじらじ」など申ければ、(第一三〇ペ)

○この中納言、人がらはよくおはしけるにや、院に和哥の会せさせ給けるに、歌人にまじりて哥書きたる、(第六一八〇ペ)

○むねとは詩作り給事を好みて、中将など聞へ給し時、(略)「野、道はたゞ青き草」とかいふ詩を、博士、学生など、あまたまうで、講じけるに、年廿に少しあまり給える若き殿上人の、みめはいとをかしくて、上の御衣など、なえよかに着なし給へるに、細太刀、平緒など、したゝかにてまじり給へる、神もいかゞ御覧ずらむとぞおぼえける。(第六一九〇ペ)

右の第一例は第一節でも述べた〈入り込む〉意のものである。「マジハル」動作の以前のものと考えられる。

第二例・第三例は、歌会・詩の席に加わる場面で、一見前掲の「マジハル」の例と同義のようだが、第二例は、中納言(実隆)が、専門の歌人の中に「まじる」のであり、第三例は中将(公能)が、博士、学生たちの中に加わっている、というのである。これも前節に記したように、〈(異質の者)が集団の中にまじっている〉意としてよからう。

○春宮大夫の末の御子は、民部卿のすゑ也とてをはしき。和琴にてぞ、おほみ遊には、まじり給けると聞へ侍し。

右は、「おほみ遊」に「和琴」の奏者として加わる、というの(第六一九五ペ)

であって前掲の「マジハル」の第三例の「内宴の詩」の席などの場合と違うので「まじる」が用いられたのであろう。

○歌「宮木野、秋の野中の女郎花なべての花にまじるべきかは」(第六一九二ペ)

右は「なべての花」の中に「女郎花」が「まじる」という用法である。

ここに、「まじろふ」が一例ある。

□(太上天皇伊通)あまりいちはやくて、世のものいひにてをはしける。籠り給へりし折も、御幸など見給て、「略」などのたまひ、又「籠りたるは苦しからねど、世にまじろはまほしき事は、人のいたく烏帽子の尻を高くあげたるに、うなじのくぼに結びてむとも思ふなり」など、世に似ぬやうにのたまひけり。(略)(第六一六四ペ)

この「世にまじろふ」は、「出仕する(宮仕えする)」の意であり、朝廷で他の公卿たちと〈交際する〉の意ではない。ここに述べられる変わったふるまいも、「まじろふ」に抵触する行為ではない。

『とはすがたり』(「語の検索は「総索引」によるが、引用とその所在頁は「新編日本古典文学全集」による)の「マジハル」は、次の三例である。

●和光の塵にまじはりたまひける御心、今さら申すべきにあらねども、いと頼もしきに、(巻四、四五四ペ)

●(二条ノ歌)おしなべて塵にまじはる末とてや苔の袂に情けかくらむ(巻四、四六六ペ)

●(二条ノ院)「略」あちこちさまよひはべれば、ある時は僧房に留まり、ある時は男の中にまじはる。(略)(巻四、四七九ペ)

第一例は、作者二条が春日神社に参詣した時の感慨を述べた一節で、神が御威光を和らげて衆愚に「まじわり」なさるの意である。第二例は、伊勢神宮に参詣した後、近くの家に泊まってその主人に贈った歌で、塵のような愚かな人々に広く「まじわる」の意である。第三例は、後深草院との再会後の別れの際に作者が院の疑いに答えて長々と述べた言葉の一節である。この「マジハル」が「男と契る」意でないことは、その前の答えの中に「一夜の契りを結びたることはべらば、本地弥陀三尊の本願に漏れて、長く無間の底に沈みはべるべし。」とあり、引用部の後にも独り寝をして来たことが語られている。ここで、「まじる」でなく「マジハル」を用いたのは、直前に「僧坊に留まり」とあるのと対句をなす言い方として、俗男の家にも「宿泊する」の意を表すためのものであったと考えられる。

これに対し、「まじる」は次のように用いられている。

○「御遊あるべし」とてひしめけば、衣被きぬかづきにまじりつつ、人々あまた参るに、誰もさそはれつつ見まらせつれば、

(巻三、四一七ペ)

○賜はりたりし御小袖を上に着て、女房の中にまじりて見まら

するに、(巻四、四六二ペ)

第一例は、衣被きの女房たちに、人々(衣被き以外の女房)が「入り込む」の意であり、第二例は、作者が院の御宮めぐりを院に見つかからないようにと、女房たちの中に「入り込む」のであり、これまでの用例の通り、(「異質のものが」集団の中に入り込む)という動作が「まじる」である。

○野の中をはるばると分けゆくに、萩、女郎花、萩、薄よりほかは、またまじる物もなく、これが高さは、馬に乗りたる男の見えぬほどなれば、(巻四、四四八ペ)

右は、萩、女郎花、萩、薄以外「まじる」ものないことをいっている。

ここで、注意されるのは複合(派生)動詞「たちまじる」である。○傳めづの入道なども、出家の後は千本の聖のもとにのみ住まひたれば、いとど立ちまじる男子おとこもなきに、(巻一、一三三九ペ)

○更け過ぎて後おはしたるも、思ひよらずあさましけれど、心知るどち二、三人よりほかは、立ちまじる人もなくて、入れたてまつりたるに、(巻三、三八三ペ)

第一例は、雪の曙(西園寺実兼)が訪れる場面であるが、「たちまじる」は傳の入道とその息子達の動作をいったものと採れる。第二例は、有明の月が訪れる場面で、ここの「たちまじる」は「心知れるどち」すなわち側近の侍女達の動作をいったものと採れる。この二つの動作主体は作者にとって異質(性や身分の違い)

「まじる」「まじらふ」と「マジハル」

ではあっても、親近な関係にある人達であって、「まじる」が表す動作と微妙に異なり、「マジハル」に一步近づいた言い方とも言えそうである。後述する『源氏物語』の「たちまじる」の用法を承けたものではなからうか。

次に「まじら(ろ)ふ」の例について、

□天子に心をかけ、禁中にまじらはせむことを思ひ、かしづくよし聞くも、「人の宝の玉なれば」と思ふぞ、心悪き。

(卷二、三三七ペ)

この例は、作者と雪の曙との間に生まれた女子を、雪の曙の北の方が連れて行って、天子にまみえることを心にかけて、禁中に「出仕する」ことをさせようと思つて養育していると聞く、という場面である。

□こは何事ぞ。すべてすさまじかりつることなり。これほど面目なからむことはまじろひて詮なしと思ひて、この座を立つ。

(卷二、三二二ペ)

ここは、宴席で席次を下げられたのに作者が腹を立て、退出する場面である。この「まじろふ」は、後深草院への宮仕えの行為の一部でありながら、こういう席次を下げられるような屈辱的場面に異質の自分が「入り込む」気持ちも込められた「まじろふ」の用法であらう。

▽ただ床を並べて臥せはべりしかば、いとど御所さまのまじろひも物憂き心地して、冬にもなりぬるを、

(『とはずがたり』卷三、三九七ペ)
右は有明の月の遺児を出産し、その世話で「まじろひ」、すなわち院への「宮仕え」も億劫な心地がして、という場面である。

四

以上、中世の作品のいくつかを採り上げ「まじる」「まじら(ろ)ふ」と「マジハル」の意味の相違を論じてきた。本節から中古和文の代表例として『源氏物語』の「まじる」「まじらふ」の意味を考えてみたい。

前節末に採り上げた『とはずがたり』の「まじらふ」の意味は、そのまま『源氏物語』(『新日本古典文学大系』による)の用例に適用できる。

□いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひ給ふ。(桐壺(一) 四ペ)

□(桐壺更衣母↓較負命婦)「(略) (故大納言↓更衣母)「たゞこの人の宮仕への本意かならず遂げさせたまつれ。(略)」と返々諫めをかれ侍しかば、はかしく後見思ふ人もなきまじらひは中々成べきことと思ひたまへながら、たゞかの遺言をたがへじとばかりに出だし立て侍しを、身にあまるまでの御心ざしのよろづにかたじけなきに、人げなきはぢを隠しつゝまじらひたまふめりつるを(略)」(桐壺(一) 一一二ペ)

この二例の「まじらふ」は、『今鏡』の「まじろふ」の例のと

ころでも述べた通り、〈出仕する〉の意であり〈交際する〉の意ではない。しかし「まじらふ」が〈出仕する・宮仕えする〉の意になるのは何故かをここで考えてみたい。右の桐壺巻から引用の例の始めの方に故大納言の遺言の中に「宮仕へ」という語が使われており、それを受けて更衣母が「はかしくしう後見思ふ人もなきまじらひ」と言っている。これは「しっかりとした後見人ぞろいの宮仕え人のなかに、そうでない者(異質の者)が入って伍すること」を意味していると考ええる。すなわち、「まじらふ」は「まじる」の、異質(身分違い)の者が〈入り込んでいる〉と近似の意味で捉えるべきものであろう。^注

□(女房↓女房)「あながちなる御事かな。このなかには、にほへる花もななめり。左近の命婦、肥後の采女やまじらひつらむ」など心も得ず言ひしろふ。(末摘花(一)二三二ペ)

「にほへる花」は、「赤鼻の女」を意味しており、そんな異質な者として「左近の命婦、肥後の采女」が話題になっているのである。

□暗うおはし着きて、御車寄するより、はなやかにけはひことなるを、ゐなかびたる心ちどもは、はしたなくてやまじらはむと思ひつれど、西面をことにしつらはせ給ひて、小さき御調度どもうつくしげにとゝのへさせ給へり。(薄雲(二)二二二ペ)

明石上のところから、紫上のところへ引き取られていく明石姫君に仕えてきた「ゐなかびたる心ちども」(乳母や少将)には、

紫上邸は、まさに〈異質の者〉として仕えることになる奉公先、という意識が「はしたなくてやまじらはむ」と「まじらふ」を用いるところとなっているのである。

□正身は、たゞかことばかりにても、まことの親の御けはひならばこそうれしからめ、いかでか知らぬ人の御あたりにはまじらはむ、とおもむけて、苦しげにおぼしたれど、

(玉鬘(三)三六〇ペ)

光源氏から誘いを受けた玉鬘は「いかでか知らぬ人の御あたりにはまじらはむ」とためらう。光源氏は、実父でなく、自分は異質のものと思うからである。

次に、「まじる」を「まじらふ」と対比してみる。

○おかしげなる侍童の、姿このまじうことさらめきたる、指貫の裾露けぐに花のなかにまじりて朝顔おりてまいるほどなど、絵にかゝまほしげなり。(夕顔(一)一一〇ペ)

○(少納言の乳母↓源氏)「(略)(紫上)いとむげに児ならぬ齡の、又はかゝしう人のおもむけをも見知り給はず、なかぞらなる御ほどにて、あまたものし給ふなる中の、あなづらはしき人にてやまじり給はん、(略)」(若紫(一)一八三ペ)

第一例は、童が花の中に「まじる」、第二例は「いとむげに児ならぬ齡」の紫上が「あなづらはしき人」という状態で「まじる」のである。どちらも異質の者として〈入り込む〉のである。

○院におぼし嘆きとぶらひきこえさせ給さま、かへりて面だたし

げなるを、うれしき瀬もまじりて、おとゞは御涙の暇なし。

(葵(一)三二二ペ)

○(弁↓惟光)「あだなる事はまだならはぬ物を」とて取れば、(惟光

↓弁)「まことに、いまはさる文字忌ませ給へよ。よもまじり侍

らじ」と言ふ。(葵(一)三三二ペ)

○(藤壺↓)まことに心づきなしとおぼして、いらへも聞こえ給は

ず。たゞ(藤壺↓源氏)「心ちのいとなやましきを、かゝらぬおり

もあらば聞こえてむ」とのたまへど、尽きせぬ御心の程を言ひ

続け給。さすがにいみじと聞き給ふしもまじるらん、

(賢木(一)三六二ペ)

第一例は、葵上の死の悲しみの中に桐壺院の弔問という「うれ

しき瀬」も「まじる」という。第二例は、お祝いの場に「忌み言

葉(文字)」が「まじる」という。第三例は、藤壺の「心づきな

し」という気持ちの中に「いみじ」という思いも「まじる」とい

う。

「まじる」の用法は、「まじらふ」よりも多様であると言えそう

である。しかし「まじらふ」に見られた〈出仕する〉の意のもの

はなさそうである。

〔注〕この考え方は夙に北山谿太『源氏物語の新研究桐壺篇』

(一九五一〈昭和二六〉年)で説かれたものである。当該例の

【語釈】に「まじらふ 交際すると解するのは当たらない。人々

の中にまじる・人々の間に伍す・仲間に加はるなどの意である。

「まじる」と同じ意味」とある。ただしこの最後の一句「まじる」
と同じ意味」には従いがたいことは本文に述べている通りであ
る。

五

それでは、『源氏物語』では何故「マジハル」は用いられなかつたのであろうか。

中世の作品に見られた「マジハル」の意に近い『源氏物語』中の用例を探すと次のようなものが見出される。

複合動詞「まじらひく」

◎君はいさゝかひまありておぼさるゝ時は、(右近ヲ)召し出でて使ひなどすれば、(右近ハ)ほどなくまじらひつきたり。

(夕顔(一)一三六ペ)

◎日やうくくだりて、楽の船ども漕ぎまひて、調子ども奏する程の、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、火ざの君は、

かう苦しき道ならでもまじらひ遊びぬべきものを、と世中うらめしうおぼえ給けり。(少女(二)三二八ペ)

◎(薫心中)「(冷泉院ハ)大方こそ隔つる事なくおぼしたれ、姫宮の御方さまの隔ては、こよなくけ遠くならはさせ給も、ことはりに、わづらはしければ、」あながちにもまじらひ寄らず、

(匂宮(四)二二二ペ)

「まじらふ」は、上述のように〈異質のものが入って伍す

る。動作を表すが、それが「つく」「あそぶ」「よる」などの動詞と結合することにより、〈交際する〉の意味が加わってくと考えられる。

複合動詞「くまじらふ」

◎(源氏↓明石上)「略」それも又、とりもちて掲焉になどあらぬ御もてなしどもに、よろづの事なためにめやすくなれば、いとなむ思ひなくうれしき。はかなきことにて、もの心得ずひがくしき人は、たちまじらふにつけて、人のためさへからきことありかし。(略)「(若菜上(三)二九〇ペ)

光源氏が、明石上を褒める詞のなかで、明石上とは対照的な「ひがくしき人」を引き合いに出して、そんな人が「たちまじらふ」と他人まで迷惑をこうむることがある、と言っているのだが、この「たちまじらふ」は、〈交際する〉の意に採ることができさる。

複合動詞「くまじる」

◎(明石上心中)やむごとなきだに、おぼすさまにもあらざる世に、ましてたちまじるべきおぼえにしあらねば、すべていまはうらめしきふしもなし。(若菜上(三)二九〇ペ)

右は、前掲の光源氏の詞「たちまじらふ」を受けて、自分の行為については「たちまじる」を用いている。ほとんど同義であるが、次の例を見る。

◎(明石上↓明石尼君)「このたびは、かく大方の響きにたちまじらむ

もかたはらいたし。もし思ふやうならむ世中を待ち出でたらば」(若菜下(三)三三三ペ)

住吉詣でに明石尼君も同行させようという光源氏の厚意に対し、明石上は低い身分の母尼君の同行を「たちまじる」で表す。

◎(明石上消息↓源氏)よろづの事、かひなき身にたぐへきこえては、げに生ひ先もいとをしかるべくおぼえ侍を、たちまじりても、いかに人笑へや。(薄雲(二)二一九ペ)

前掲の例よりも以前の場面で、明石姫君が二条院の人々の中にはいることに「たちまじる」を用いている。以上の三例から見ると「たちまじる」は、明石上の一種の謙讓表現でもあるようである。

◎(乳母たち)「略」これは明け暮れたちまじり給て、年ごろをはしましつるを、何かは、いはけなき御ほどを、宮の御もてなしよりさし過ぐしても隔てきこえせん、とうちとけて過ぐしきこえつるを、(略)「(少女(二)二九八ペ)

◎(柏木↓小侍徒)「略」(女三宮)院の、あまたの御中に、又並びなきやうにならばしきこえ給ひしに、さしもひとしからぬ際の御方く(略)にたちまじり、めざましげなることもありぬべくこそ。

(略)「(若菜下(三)三六〇ペ)

右の前例は、乳母たちが、夕霧と雲居雁の仲について言っており、後例は、柏木が女三宮の降嫁について言ったもので、もとより謙讓表現ではない。こういう例からすると、「たちまじる」は、

「まじる」「まじらふ」と「マジハル」

「たちまじらふ」よりも、〈交際する〉動作を婉曲に表現したものと採るべきかと考える。

「たちまじらふ」「たちまじる」が、〈交際する〉の意になるのは、「たち並ぶ」と同じく、「たち（立ち）」が〈対等に〉の意を表すからである。^注

◎（乳母→右近）「略」あがおもと、早くよきさまに導きまきこえ給へ。高き宮仕へし給人は、をのづからゆきまじりたるたよりものし給らむ。（略）「玉鬘（二）三五三（一）」

◎（兼→大君）「心ぐるしう見めぐらさるゝ御すまるのさまなりや。たゞ山里のやうにいと静かなる所の、人もゆきまじらぬはべるを、さもおぼしかけば、いかにうれしくはべらむ」

（椎本（四）三七〇（一））

◎葦手の草子どもぞ、心くはかなふおかしき。宰相の中將のは、水のいきをいゆたかに書きなし、そゝけたる葦の生いざまなど、難波の浦に通ひて、こなたかなたいきまじりて、いたう澄みたるころあり。（梅枝（三）一六五（一））

「ゆきまじる」は、（そこに）行って〈入り込む〉から、〈交際する〉の意に近くなる。「いきまじる」の例は〈交差する〉の意になり、「マジハル」とほとんど同義語になる。

〔注〕拙著『平安時代和文語の研究』一八三—一八五（一）。「たち並ぶ」の「たち」他に〈対等に〉の意を表す例として『源氏物語』から追加すると、次のようなものが見出せる。

「たちつづく」

いにしへの朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕べ、思出で給人は、権中納言、衛門督、又おとらずたちつゞき給にける、世々のおぼえ、有さま、かたち、用意などもおさくをとらず、官位はやゝ進みてさへこそなど、齡の程をかぞへて、なをさるべきにて、むかしよりかくたちつゞきたる御仲らひなりけり、とめでたく思ふ。（若菜上（三）二六三（一））

〈跡を継ぐ〉の意と〈対等に並んでいゝ〉の意とが込められていると解される。

「たちくだる」

この御箱には、たちくだれるをばませ給はず、わざと人のほど、品分かせ給つゝ、草子、巻物みな書かせたまつり給。

（梅枝（三）一六六（一））

（左中弁→妹乳母）「略」みなその人ならずたちくだれる際にはものし給はねど、限りあるたゞ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる。（略）

（若菜上（三）二一六（一））

〈劣っている〉の意で用いられているが、「たち」に〈対等である〉の意があつて、〈対等であることからは劣っている〉と解されるのではないか。

動詞「立つ」には、次のような用法もある。

（近江君）「略」夜さりまうでむ。おとゞの君、天下におぼすとも、この御方くすげなくし給はむには、殿のうちには立てりなんはや」（常夏（三）二二（一））

〈身を置く〉のような意であるが、〈対等に〉の意味も込められていたと考えられる。

おわりに

本稿は紙幅の制約もあって、中古については『源氏物語』の用例についてしか述べられなかった。しかし、次のように結論づけようとする。よかろうと考える。

物語用語（和文語）は、登場人物の動きを精細に描写するために、複合動詞・派生動詞を多用した。日常用語の「イヌ（寝）」は「ねいる（寝入る）」に、「キタル」は「きつく（来着く）」に、「オソル」は「おもひおづ（思ひ怖づ）」に、というように複合動詞を用いた。

「マジハ（ワ）ル」は、上代語から使われており、現代語に至っている。「まじる」も同じだが、「まじらふ（まじらう）」「まじろふ（まじろう）」は現代語には至っていない。

日常用語は、物語用語すなわち文学用語とは異なり、文献に現れる時は、「用語選択の意識の極めて弱い状況下」において、であったことが考えられる。^注

前掲の日常用語は、いわゆる「訓点語（漢文訓読語）」であり、難解な仏典・漢籍の原文を、当時の平易な日常用語で読解したものであったのである。

〔注〕 拙稿「平安時代の表現語彙と読解語彙―文体史研究のあり方試論―」（『日本文学研究』第三八号・二〇〇三年）を参照されたい。